

13. 西保における浄土真宗

西 本 陽 一

1. はじめに
2. 浄土真宗の教えと作法
3. 真宗門徒のお盆
4. おわりに

1. はじめに

調査実習での聞き取りの際に私たちは、「それを知りたいければこれを見なさい」と、冊子や手引書を見せられることがあった。長太路の民話（14 章参照）は公民館によって冊子にされており、仏事の作法については教団発行の手引書があった。仏教に関連した行事や儀式についての聞き取りでは、『お内仏の給仕と心得』と『真宗大谷派の葬儀の心得』という教団発行の二冊の手引書をいただいた。そんなときに私たちは、ありがたいと思うと同時に、遠い外国の調査地で「彼らの」慣習について尋ねた際に、「これを見なさい」と、「彼らの」文化・社会について書かれた民族誌を渡された人類学者のような気持ちを覚えた。

しかし仏事に関する手引書の存在は、識字社会において、住民自身が文字化された資料を用いて行事や儀式をおこなっているという現状の反映のみではないようである。調査地域の圧倒的多数の世帯は浄土真宗の門徒¹であったが、浄土真宗には独特の作法があり、教団側がそれを住民に教えるためにマニュアルを発行しているという側面があるようである。

「門徒もの知らず」という言葉は、他宗派の信者が浄土真宗の信者について、仏教の作法を知らないと批判するときに用いられる言葉である。これに対して、浄土真宗側は自分たちの教えが「雑多な迷信的なものをすべて拭い去」ろうとするものであるゆえに、このような批判を受けるのだとし、「むしろこころよいことだと受け取るべきであります」と主張する（菊池 1983: 70）。また「浄土真宗は従来、ともすると民俗性の少ない教団」（吉田 374）、「真宗は民族固有の習俗や信仰を破壊する反民俗性が強く、真宗地帯は民俗伝承の空白地帯」（蒲池 1993: 1）と言われる。浄土真宗の実践の手引きである『お内仏の給仕と心得』（菊池 1983）を読むと、過度な儀礼主義をいましめ、さまざまな「迷信的なこと」を否定する語句にしばしば出会う。

本章は、「迷信的なもの」を廃し伝統民俗との習合を避けるとされる浄土真宗について、西保地区でのお盆の実践のあり方を報告し、真宗独特の教えと地域での実践との関係について考察する。

2. 浄土真宗の教えと作法

浄土真宗特有の作法にはさまざまなものがあり、それらは浄土真宗の独特の教えにもとづくものである。本節では、『お内仏の給仕と心得』（菊池 1983）により、浄土真宗独特の教えと作法のいくつかを確認したい（括弧内は該当ページを示す）。

・ 仏壇と本尊

浄土真宗でも仏壇は否定されない。しかし、仏壇の向きや購入すべき日の良し悪しを気にかけることは、「迷信的なこと」として否定されている（pp.26-27）。

浄土真宗の仏壇の基本は、中央の「ご本尊」とその前に置かれる「三つ具足」（中央の香炉および香盒、向かって左の花瓶、右の燭台）である。ご本尊とは阿彌陀如来である。本尊の両脇には「お脇掛」と呼ばれる、「九字・十字のお名号、または親鸞聖人・蓮如上人のご影²」が掛けられ、さらに側面には「先祖代々の法名」が掛けられる（pp.28-32）。阿彌陀仏とは「さとりの世界……から、私たち一切衆生を救うために、本願を立て、永劫の修行をもって成就したもうた報身仏」であり、「私たちが、ほんとうにすくわれるのは、阿彌陀仏に南無と帰命するときで……南無と帰命で着ますのは……ひとえに阿彌陀仏の本願のおこさせたもうゆえ」（p.35）という、他力本願が説かれる。

・ 法名（位牌の非使用）

日本の仏教は、極言すれば、位牌を中心とした祖先祭祀（先祖供養）と見ることができるが（cf. スミス 1996）、浄土真宗では「位牌は用いない」（p.41）。位牌を用いないことについては、「位牌というのは位の牌で、亡き人の生前の官位姓名を記した木札で……中国の儒家で用いたことから出たもの」（p.41）という理由が挙げられている。その代わりに浄土真宗では、「法名」を掛軸にして、仏壇の側面に掛ける。法名は、「仏門に帰入して、新しく仏道生活に入ったものがいただく仏法の名で……生きているうちにいただく」（p.42）という点で、戒名と区別される。

・ 先祖供養

『お内仏の給仕と心得』では、「大事な先祖代々の法名をなぜそんな仏壇の左右両側におかけするのでしょうか。むしろ中央にまつた方がよいように思われるのですが」という質問に答える形式で、「先祖代々の敬い」についての浄土真宗の考えが述べてられている（p.44）。

仏壇というものは、だいたい先祖など死者をおまつりする場所というようにお考えの方もあるようです……もう一度前に述べた仏壇の意義、ご本尊の意義を思いかえしてみてください。親も先祖も、この家の血縁につながった深いご縁の人達がすべて……その生涯をみちびかれました。そしてなくなられて阿彌陀の仏国、浄土に生まれられました。ですから、親・祖先の徳をしのび、ご恩を思いますならば、正面にご本尊・お脇掛、そして両側に親・祖先の法名をおかけし

てお給仕することこそ、法にかない義にかなった、尊崇の仕方でありましょう (p.44)。

長さを厭わず引用したのは、この説明が祖先の問題について微妙な説明となっていることを示すためである。ここでは、仏壇によって先祖や死者を祀る一般のやり方を否定しているが、親や祖先の恩徳に感謝すること自体はよいこととされている。親や祖先は、「なくなられて阿弥陀の仏国、浄土に生まれられました」と述べる部分は、死者が霊として存在することを否定し、死後すぐに仏として生れ変わったという考えにもとづくもの言えるだろう。他宗では、人が死んで次の生を享けるまで中間的存在として存在するという考えがある。しかし浄土真宗では、『浄土に生まれる』とは……現生に信心が決定したとき、ただちに浄土に生まれることに定まる……そしてこの世界の寿命のつきたとき、ただちに仏の国、さとりの世界に入る」(p.109)とされる(往生即成仏)。日々の勤行でも、「おつとめするのは……先祖にお経をあげるのではない」(p.61)として、先祖供養としての読経を否定している。死者がすでに仏として浄土に生まれているならば、死者の死後の幸福(冥福)を願って、供養する必要はないという論理であろう。

・焼香

他宗では線香を折ることはタブーとされることがあるが、浄土真宗は「線香を香炉の大きさに応じて適宜に折り、一・二本横に火のついた方を左にして灰の上に置」くように教えている (p.58)。この作法について、『お内仏のお給仕と心得』はそうすべき理由を述べていない。

3. 真宗門徒のお盆

前節では、浄土真宗特有の教えと作法のいくつかを確認した。つづいて本節では、お盆における実践を例にとつて、日本で一般に見られるお盆、真宗の手引書が教えるお盆の考え方や作法、西保地域で実際におこなわれているお盆のあり方を記述し、それらの間の類似点と相違点について検討する。

3-1. 日本のお盆

事典によれば、「お盆」とは「盂蘭盆」(うらぼん)のことで、精霊会(しょうりょうえ)や魂祭(たままつり)などとも言われるが、「7月15日を中心に、祖先や死者の霊を家にむかえて供養する仏教行事」(『エンカルタ総合大百科事典』)である。お盆は地域によって7月に行われる地方と、8月に行われる地方がある。

盂蘭盆については普通、釈迦の説いた経典でなく、のちに中国で撰述されたと考えられる『仏説盂蘭盆経』にその起源が求められる。

六種の神通力を得た釈尊の弟子目連は、亡くなった自分の母が餓鬼道に堕ちて全身骨と皮になっ

てやせ衰え苦しんでいる姿を見る。驚き悲しんだ目連が神通力で御飯を鉢に盛って供養する。母は喜んで食べようとするが、御飯はたちまち火炭となって食べることが出来ない。目連は大声で泣き悲しみ、釈尊に救いを求めた。釈尊は、目連はまだ修行が浅いので一人の力では何ともできない、しかし、幸いなことに七月十五日は衆僧自恣³の日に当たっており、その衆僧に供養をすれば亡母を救うことができる、と教えた。はたしてその功德により亡母は餓鬼の苦しみから救われた。毎年七月十五日に自恣の衆僧に盂蘭盆の供養をすればその功德により現在の父母と七世の父母を餓鬼の苦しみから救うことができるという釈尊の教えにより、以後、弟子たちはそれを実践することとなった。(新谷 2003: 66⁴)

「盂蘭盆」という言葉の由来については諸説があるが、そのひとつは器物の盆を指すというものである。『仏説盂蘭盆経』の中にも、「当に七世の父母及び現在の父母の厄難中の者の為に、飯百味、五果、汲灌盆器、香油、錠燭、床敷、臥具を具へ、世の甘美を尽くして以て盆中に著け、十万の大徳衆僧を供養すべし⁵」という文句が見える(新谷 2003: 67)。「盂蘭盆」という語の意味はともかく、器物に入れられた食物や日用品は、『仏説盂蘭盆経』の物語の中では、僧侶への「供養」のための品であることがわかる。

ところが古代より日本における盆行事の中心が、僧侶への供養ではなく、死者への供物(盆供)の奉獻にあったことが、奈良や平安時代の文字記録から分かる。さらに鎌倉時代の『吾妻鏡』などからは、「盆供養の対象は先祖の霊魂だけでなく怨霊そのほか幅広い死者の霊魂へ広がっていき、やがて、寺院の行事では盂蘭盆会に加えて万灯会や施餓鬼会が習合してくること」になる(新谷 2003: 70-73)。

後にはまた、お盆の際に先祖の精霊を家に迎え、その後に送りかえす、今日ひろく見られる風習が現れるようになる。同じく新谷尚紀によれば、『明月記』の記述(1230年)は、「先祖の精霊を高い灯籠を目印として家々に迎えて供養する風習の起こり」を示し(新谷 2003: 73)、近世初頭の『義演准后日記』の記述(1597、98年)からは、「盆の精霊の迎えと送りが一般化してきている状況をうかがうことができる」(新谷 2003: 75)。

そして、江戸時代には「迎え火や送り火、精霊棚や供物、茄子やキュウリの牛馬、盆踊りのようすなど現在の民俗として伝えられている行事が」(新谷 2003: 77) 広く見られるようになっている。

お盆におこなわれる行事としては、次のようなものがある。「7日(七日盆)には墓掃除、井戸替や大掃除などをし、13日夕方までに精霊(しょうりょう)をむかえてまつる盆棚をつくり、仏壇から位牌(いはい)をうつして供花や供物、キュウリやナスでつくったウシやウマなどをそなえる。また棚の材料や供花などを売る盆市がたつ。棚は仏壇近くにもうけるが、前年の盆以降の死者の新仏は縁側などに、無縁仏は戸外にもうける所もある。13日の夕方は家の前で迎え火をたいて精霊をむかえてまつり、提灯や灯籠もともされる。精霊をおくる15日の夕方から16日にかけては送り火をたき、川や海辺では小さな灯籠をながして霊をおくる。……盆には盆踊があり、16日は藪入りで、奉公人は暇をもらって実家にかえった。今も盆期間の帰省者は多い」(『エンカルタ総合大百科事典』)。

3-2. 真宗教義におけるお盆

次に、浄土真宗の手引書によって、浄土真宗がお盆をどうとらえ、どのようにおこなうべきと教えているかを確認し、上で述べた日本で一般的に見られるお盆との違いを指摘する。

瓜生津隆真・細川行信編『真宗小事典』は、お盆の意味について次のように説明している（瓜生津・細川編 1987:221）。

盂蘭盆会 八月十五日前後。関東地方では七月十五日前後が多い。一般に「お盆」といって先祖供養がひろく行われるが、真宗では供養ではなく、先祖にたいする感謝の法要という意味で「歓喜会」（かんぎえ）ともいう。

菊池祐恭『お内仏のお給仕と心得』には、お盆に関連するものとして、次のような記述がある（菊池 1983）。

……打敷は特別の場合（年忌法要、報恩講、お盆、彼岸、正月など）のほかは平常はかけません（p.56）。

……お盆とはくわしくいえば「盂蘭盆会」といいます。……

釈尊のお弟子目連尊者が、百味の飯食をもって四方の僧たちを供養し、その功德によって餓鬼道に落ちて倒懸の苦しみをうけている母を救うたという経説が行事となったもので、父母や祖先を追憶し、これに孝養をつくすということが、この行事の趣意であります。しかし、今日ではそれにいろいろな迷信的なものが附加されてもいるようです。

わたくしたち真宗門徒としては、雑多な迷信的なものをすべてぬぐい去り、（そのために門徒もの知らずなどと言うひともありますが、むしろころよいことと受け取るべきであります）静かに目連尊者の故事を偲んで、深く親の恩、祖先の恩をおもい、その孝養報恩の念を仏法の報恩にまで深め高め、これを縁としていよいよ信へとすすみ、本願念仏のすくいをよろこび、そして、道 緯 禪師（七高僧の第四祖）の

「前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪らい、連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽さんが為の故なり」（親鸞聖人が教行信証にご引用）

こお心をかみしめたいことであります。

したがって、「お精霊迎え」や「精霊祭り」などいたしません。またさまぎまの雑多なかざりや、迎え火、送り火などもいたしません。

……代々の法名はすべておかけします。……

……次にできれば仏壇前に「切籠」というのを下げます。上部が八角形の火袋になっており、下部に切紙の尾を附けた俗にいう盆灯籠であります。火袋とは赤と紺、尾は白、赤、紺の三色を段々にしたもので、堅に細く切れ目をつけ、また火袋の各隅角には尾と同色の垂れをつけます。おつとめの時、火袋の内に灯油またはろうそくに明りをともします。（pp.69-72）

ふたつの手引書において説かれているのは、お盆が先祖供養の機会ではなく、父母や先祖を思い起こして感謝する機会だということのようである。先に述べたように、死者が死後すぐに浄土に仏として生まれるのであれば、死者の死後の幸福を心配する必要はないはずで、そのためお盆でも亡親や先祖の供養をする必要はなく、ただ父母や先祖へ感謝するのだということであろう。

しかし、『お内仏のお給仕と心得』がお盆の起源として引く、目連尊者の餓鬼道に堕ちた母の物語から、お盆が父母や先祖への感謝の機会だという説明を導くことは難しいように見える。その「起源伝承」においては、亡母は死後に「倒懸の苦しみ」にあり、目連尊者は（死者に対してでなく）僧侶に対して供養する（供物を捧げること）ことによって「功德」を積み、その功德によって亡母を救ったと語られている。この物語から導かれるべきものは、単に「父母や祖先を追憶」するのみでなく⁶、死後不遇にある両親や祖先を幸福に導く行為をすべきだという教訓である方が自然である。

目連尊者の物語で描かれているような、「僧侶に対する供養」を通した積徳と功德の死者への回向という観念は、浄土真宗ばかりでなく、日本の仏教一般においてはほとんど見られない。現在の日本語で「供養」という語は、「仏・法・僧の三宝を敬い、これに香・華・飲食物などを供えること」（『大辞林』）という元々の意味よりも、「死者の霊に供え物などをして、その冥福を祈ること」（『大辞林』）という意味であり、具体的には、死者に供物を捧げるなど、死者の死後の幸福を実現するための直接的な行為を指すと言える。盆棚や施餓鬼棚を置く行為は、そのような観念の表われである。

一方浄土真宗は、「お精霊迎え」や「精霊祭り」を「雑多な迷信的なもの」として否定している。このため、迎え火（死者の霊を迎えること）、精霊棚（死者に供物を供えること）、送り火（霊を送ること）はおこなうべきでないものとなる。お盆に墓参りをすべきかどうかについては、手引きは何も述べていない。

また、真宗の手引書は、お盆の際には「代々の法名はすべて」掛けるようにと教えている。この行為自体にはさまざまな意味づけが可能であるが、日本で一般に見られるお盆で、先祖の位牌が取り出されて盆棚などに置かれる行為と同種のものと見ることができる。

3.3. 西保地区浄土真宗門徒のお盆

以上までで、日本で一般に見られるお盆を概観し、教団発行の手引書によって、浄土真宗が教えるお盆のあり方を見た。以下では、地区での聞き取りで得られた浄土真宗門徒のお盆のやり方について記述し、その特徴を検討したい。

<上山在住の男性、76歳>

8月14日には、「お盆づとめ」をする。「ゴボサマ」（御坊様、僧侶のこと）が門徒すべての家を回って経をあげる。そのおつとめは、墓でおこなったり、お仏壇でおこなったりだ。（仏壇に）位牌はない。ナスやキュウリで牛馬の人形を作ったりすることはない。墓参りする。……「お盆になるとご先祖様が帰ってくる」。

<上山在住の男性、67歳>

お盆のお墓でのおつとめは、正信偈のみで5-6分でおわる。墓は上山に点々としており、お坊さんはそれをひとつずつまわってゆく。8月13日から3日かけてすべてをまわる。

<上山在住の男性、78歳>

お盆の時には、仏壇のふたつある扉のうち外側のひとつのみ開けておく。中扉は外から透けて見えるものなので、こちらは閉めておいても半ば開いているような感じである。

<大沢在住の女性、70歳>

8月13日には、盆団子を置く。皿に白玉団子を置いて、「おばあちゃんの前」（亡義母の遺影の前）に置く。盆団子は白玉団子だが、昔は「ゼータダンゴ（在田団子）」を作った。昔は（ゼータダンゴは）小麦粉で作った。ゼータ団子は平たくして、きなこをつけていた。今では白玉粉を買ってきて白玉団子を作る。団子は一日置いてさげてしまう。

8月14日には、墓で「ゴボサマ」（御坊様、僧侶のこと）がおつとめをする。盆の期間には、仏壇には電気をつけている。（仏壇の）扉はふたつとも開けておく。左側に「ボンバナ」（盆花）を、壺みたいなの（華瓶のことか？）に入れて、立てる。

ナスやキュウリで人形を作ることはない。家の前や道に、灯明を下げることもない（送り火や迎え火はしない）。するのは墓参りだけ。墓前では、線香、蝋燭を立てるが、墓石に水はかけない。墓掃除はその前にしておく。

<西二又在住の男性、82歳>

お盆には、3日ほど仏壇を開いておく。中の扉も全部。灯りをつけ、線香を燃やす。ナスやキュウリの人形は作らない。家の外などに、灯明などは点けない（送り火や迎え火はしない）。ここでは（誰も）点けない。お坊さんにたのめば、お墓でおつとめをしてくれる。お墓では線香を燃やし、蝋燭を点ける。お墓での線香は（仏壇のものとの異なり、折って横になどはせず、墓の作りがそうなので、立てる）。墓には花を供える。墓には水を掛けない。花を添える。お墓参りは13日からの3日間のうち、いつやってもよい。仏壇を開けておいて、「打敷」を敷く。打敷は、お盆にかぎらず、特別なときには敷く。「盆棚」は知らない。仏壇にはお供えをする。魚はだめ、肉もだめだが。仏飯（ぶっぱん）を供える。仏飯はその日に下げるが、お供えはずっとおいておく。鶴の像の灯り（「鶴亀の燭台」であろう）を取って、そこに蝋燭を置き、点す。

<上山在住の男性、57歳>

願誓寺の「ゴボサマ」（御坊様、僧侶のこと）が墓でおつとめをする。天気が悪ければ家です。14-15日は仏壇を開く。花だけ供え、団子や饅頭などは供えない。ねずみが齧るし、家にいる猫が入ろうとするので。この辺りは（金沢で見られるような）「キリコ」はせん。墓もせんし、家もせん。位牌はない。「ご先祖様は盆になりや来るが。（位牌など）そういうもんはねえ」。

浄土真宗門徒のこれらの方々の声から分かるのは次のようなことである。

- ・ 西保地区ではお盆は8月15日を中心に数日間おこなわれる。
- ・ お盆の期間には、正月などと同様に、仏壇の扉が開かれ、仏壇の灯りが点されつづける。ふたつある仏壇の扉の両方あるいは外側だけ開くかは家によって異なっている。
- ・ お盆の期間中には、浄土真宗の仏具である「打敷」が敷かれる。
- ・ お盆の数日間に、家の外などに迎え火や送り火をおくことはない。
- ・ 精霊の乗り物とされる、ナスやキュウリでつくられる牛馬の人形は見られない。
- ・ 盆棚や精霊棚が設けられることはない。無縁仏や餓鬼などのために、特別の供物が用意されることもない。
- ・ お盆の期間に仏壇にものを供える行為については、簡素で、祖先への供え物という感覚は明瞭でない。供えられるものがあれば、肉魚類は避けられ、団子という例が一例聞かれたのみである。
- ・ お盆中に人々は墓参りに行き、僧侶によるお勤めも多くの場合、墓前でおこなわれる。
- ・ 「お盆にはご先祖様が戻ってくる」という観念については、人々のあいだに共有されている。
- ・ 金沢で見られるような「キリコ」は、見られない⁷。

このように、西保地区の浄土真宗門徒のあいだでおこなわれているお盆のやり方は、日本で一般に見られるものと比べると、共通する部分もあり、異なる部分もある。

異なる部分としては、迎え火や送り火を用意する慣習がなく、特に死者への供物が置かれる盆棚や施餓鬼棚が設けられないことである。

一方で、死者の遺影の前に団子を供えるという実践も一例聞かれ、使者へ供物を捧げるという観念がなくはないことを示唆している。同様に、浄土真宗門との間でも、お盆は「ご先祖様が戻ってくる」時期だと考えられており、この点は教団の手引書が教えるもの（お盆は両親や先祖に感謝する機会という考え）とはやや異なるものである。微妙な問題であるが、死者が霊として存在するという考えが、住民の中にあるように見える。

4. おわりに

本章では、浄土真宗独特の考え方や作法のいくつかを、教団発行の手引書によって確認した後、お盆を例にとって、日本で一般におこなわれるお盆、浄土真宗が教えるあるべきお盆、さらに地域で実際におこなわれているお盆を比較検討した。

浄土真宗の教えについては、「雑多な迷信的なもの」を否定し、日本古来の民俗との混交を避けようとする傾向が指摘されている。そのため、お盆のやりかたも、日本で一般に見られるような、精霊としての先祖を迎えるという側面は否定され、先祖への感謝という意味づけがなされる。一方で、地域の門徒の人々のお盆の実践においては、教団が否定する多くの行為（迎え火と送り火、盆棚、施餓鬼棚など）は見られない一方で、お盆に先祖が戻ってくるという観念はひろく共有されていた。西保に

おける浄土真宗は、地域の人々の生活に親しい、生活宗教とでも呼ぶべきものかもしれない。

注

¹ 浄土真宗の信徒を指すときには「門徒」という言葉が用いられる。

² 「お名号」の場合は、向かって右脇に「帰命尽十方無碍光如来」、左脇に「南無不可思議光如来」を掛ける。一方で、「ご影」の場合には、右に「親鸞聖人」、左に「蓮如上人」の御影を掛ける（菊池 1983: 38-39）。

³ インドの仏教教団では雨季の3ヶ月間、修行者たちは外出を避け、一箇所に定住して修行に専念した。これが安居（あんご）であるが、その最終日は普通、陰暦7月15日で、この日には全員が集まり、修行中のことを互いに反省し、自発的に罪を告白懺悔した。これを自恣（じし）という。後に西域地方で、この自恣の日に僧侶を供養すると、過去七世の父母を救うことができるという信仰が生じ、盂蘭盆の行事となって、中国・朝鮮・ベトナム・日本などに伝えられた（『岩波仏教事典第二版』「自恣」を参考）。

⁴ 新谷尚紀による原漢文の意訳。

⁵ 新谷尚紀による原漢文の意訳。

⁶ 「これに孝養をつくす」ということが、具体的にどのような行為を指すかは明らかでない。

⁷ 手引書『お内仏のお給仕と心得』（pp.70-71）が「できれば」あればよいと教える「切籠」（きりこ）は、その形の記述や写真例を見た限り、金沢のお盆で見られる「キリコ」とは異なるものである。